

# 第1章

## 家庭・学校・地域社会へのメッセージ

みんなで育てよう、心豊かでたくましい長崎っ子

### 家庭 温もりの中で社会性の基本をはぐくむ場に

- 温もりのある家庭をつくりましょう
- 規律ある生活習慣を定着させましょう
- 善悪の判断ができる子どもに育てましょう

### 学校 夢をはぐくみ生きる力を育てる場に

- 集団生活のルールのもとで、  
学校生活を充実させましょう
- 自己の生き方を見つめ、考える力を育てましょう
- よりよい人間関係を築く力を育てましょう

### 地域社会 大人のつながりで子どもが育つ場に

- 地域行事等への参画体験の場をつくりましょう
- 子どもの健全な成長を促す環境をつくりましょう
- 地域と学校の連携を積極的にすすめましょう



### ○ 温もりのある家庭をつくりましょう

家庭は子どもが育つ基盤です。家族の愛情の中で育った子どもは、自分が大切にされていることを実感し、自分も他人も大切にすることができます。このことが子どもの生きていく力をはぐくみます。

### ○ 規律ある生活習慣を定着させましょう

あいさつ等のマナーや毎日の学習習慣など、規律ある生活習慣を定着させることは大切なことです。基本的な生活習慣をしっかりと身に付けさせることが、社会の一員となるための基盤をつくります。

### ○ 善悪の判断ができる子どもに育てましょう

自分で考えて、判断し、行動できる力を養うことは大切なことです。社会における基本的なルールを日頃から家庭でしっかりと教えることで、善悪を正しく判断し、行動できる子どもが育ちます。

- 集団生活のルールのもとで、  
学校生活を充実させましょう

学校では、生活規律と学習規律を定着させることで、すべての子どもが楽しく安心して学ぶことができます。集団生活のルールを共有させることが、学校生活の充実につながります。

- 自己の生き方を見つめ、考える力を育てましょう

道徳教育の充実を図ることは高い理想を求め、希望や志を持って生きようとする態度を育てることにつながります。様々な教育活動を通して人の生き方や自然・社会・文化にふれさせることで自己の生き方を見つめ、考える力がはぐくまれます。

- よりよい人間関係を築く力を育てましょう

社会で生きていくためにはたくましい心と人間関係を良好に築く力が必要です。様々な体験活動や交流活動を積極的に推進することで、集団の中でよりよい人間関係を築く力が育ちます。

## 地域社会 大人のつながりで子どもが育つ場に

### ○ 地域行事等への参画体験の場をつくりましょう

地域の行事、体験活動等に参加・参画させることは、地域の一員であることを自覚させます。地域の子どもは地域で育てるという気概を持つことが、次代を担う子どもを育てます。

### ○ 子どもの健全な成長を促す環境をつくりましょう

大人が丸となって行う積極的な声かけは、子どもたちの非行の芽を摘み、健全な成長を促す環境づくりにつながります。

### ○ 地域と学校の連携を積極的にすすめましょう

地域と学校の連携をすすめることは、地域の方々が子どもや保護者を知る機会となり、大人と子どもや大人同士の関係が深まることにつながります。地域の絆が深まることで、子どもたちの育ちが豊かになります。

## 【家庭へ】の背景となる主な分析

- ① 「人に暴力をふるう」「友だちにお金や品物を強要する」「万引きをする」「薬物（シンナー等）を使用する」の触法行為について、この10年間の経年比較を見ると、他の項目よりも高い規範意識を維持してはいるものの、その割合が若干減少する傾向が見られる。  
⇒p. 26
- ② 日常生活での友だちの行為に対して「悪い」と回答した児童生徒の割合は、「家庭を楽しい」と回答した群が、「家庭を楽しくない」と回答した群よりもほとんどの項目において高い。  
⇒p. 60
- ③ 日常生活での友だちの行為に対して「悪い」と回答した児童生徒の割合は、家庭で朝の「あいさつをする」と回答した群が、「あいさつをしない」と回答した群よりもほとんどの項目において高い。  
⇒p. 62
- ④ 日常生活での友だちの行為に対して「悪い」と回答した児童生徒の割合は、「朝食を食べる」と回答した群が、「朝食を食べない」と回答した群よりも、すべての項目において高い。  
⇒p. 65
- ⑤ 児童生徒の下校後の学習時間は、この10年間の経年比較を見ると全体的に増えている傾向にあるが、学年が上がるにつれて「ほとんどしない」割合が高くなる傾向は変わっていない。  
⇒p. 67
- ⑥ 「注意の程度」について、「よく注意する（される）」「時々注意する（される）」と回答した割合は、全項目において保護者が高く、児童生徒が低い。ただし、保護者が「注意する」割合が高い項目ほど、児童生徒も「注意される」割合が高くなっている。  
⇒p. 69
- ⑦ 「家の人にしてほしいこと」について、平成24年度において小5、中2では「良いことをしたときは褒めたり認めたりしてほしい」と回答した割合が最も多くなっており、高2においても3番目に多い。また、この10年間の経年比較を見ると、この項目を回答した割合は全校種において増加している。  
⇒p. 71
- ⑧ 「家の人すばらしさ」について、「家族のために一生懸命に働いてくれるところ」「子どものことを大切にしてくれるところ」「家庭を明るい雰囲気してくれるところ」が平成24年度において全校種で上位3項目である。また、「特にない」という回答をしている全児童生徒はこの10年で14.4%から10.6%と3.8ポイント減少している。  
⇒p. 75
- ⑨ 「家庭のしつけ」について、「家庭のしつけがあまりされていない」に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した保護者の割合は平成24年度では64.2%である。また、「しつけがなされていない原因」として「親自身がマナーやエチケットを十分身に付けていないから」を選択した保護者が最も多くなっている（約5割）。  
⇒pp. 76～79
- ⑩ 「現在の青少年の憂慮すべき点」について、教員・保護者の合計で回答の割合が最も高いのは、「自己中心的な考えや行動が多い」であり、次いで「忍耐力がない、我慢できない」、「精神的なたくましさが乏しい」の順である。  
⇒pp. 128～129

## 【学校へ】の背景となる主な分析

- ① 「日常生活での友だちの行為に対する善悪の判断」で、「悪い」と回答した児童生徒の割合は、多くの項目で学年が上がるほど低くなる。ただし、「人に暴力をふるう」「万引きをする」「他人の自転車を無断で使用する」「薬物（シンナー等）を使用する」は、学年が上がるほど高くなる。平成 19 年度と比較して、高2は全ての項目が向上している。小5ではほぼ全てで低下している（15項目中14項目）。  
⇒p. 25
- ② 「人に暴力をふるう」「友だちにお金や品物を強要する」「万引きをする」「薬物（シンナー等）を使用する」の触法行為について、この 10 年間の経年比較を見ると、他の項目よりも高い規範意識を維持してはいるものの、その割合が若干減少する傾向が見られる。  
⇒p. 26
- ③ 友だちの行為を見てどうするかという「対応の仕方」については、平成 24 年度の全ての項目において、「何も言わない」という回答が、学年が上がるにつれて割合が高くなっている。平成 19 年度と比較すると、全ての校種においてほとんどの項目で割合が増加している。また、新しく加えた項目「本人がいないところで悪口を言う」ことに対して「何もいわない」と回答した割合は高2で5割を超えている。  
⇒p. 36
- ④ 「学校生活で満足していること」について、全校種で回答の割合が高い順に、「友だちがいる」、「学校行事が楽しい」である。次いで、小5では「先生にめぐまれている」、中2、高2では「部活動が楽しい」となっている。  
⇒p. 85
- ⑤ 「学校生活で満足していること」について、「先生にめぐまれている」と回答した群の児童生徒は、回答していない群よりも、「授業中の行為に対する感じ方」について「とても悪い」「少し悪い」と回答した割合が、全ての項目において高い。また、「先生にめぐまれている」と回答した割合は小5で4割を超えているが、中2、高2においては2割程度となっている。ただし、中2、高2では平成 19 年度と比較してそれぞれ増加している。  
⇒pp. 85～86
- ⑥ 学校の役割として、教員、保護者ともに「集団生活のルールを身に付けさせる」（教員 63.6%、保護者 58.4%）、「学力を身に付けさせる」（教員 59.1%、保護者 53.3%）、「人間関係を築く力を身に付けさせる」（教員 35.3%、保護者 38.7%）という回答が共通して上位3位を占めている。  
⇒pp. 92～93
- ⑦ 「現在の青少年の憂慮すべき点」について、教員・保護者の合計で回答の割合が最も高いのは、「自己中心的な考えや行動が多い」であり、次いで「忍耐力がない、我慢できない」、「精神的なたくましが乏しい」の順である。  
⇒pp. 128～129
- ⑧ 「子どもの生き方」について、児童生徒と教員・保護者の回答に大きな差が出ている。中でも「その日その日を楽しく生きる」「自分の趣味を大切に生きて生きる」は児童生徒が高く、「知識や教養を身に付け精神的に豊かな生活をおくる」は教員と保護者が高い。他の項目についても大人と子どもで差があるが、「家庭や家族を大事にして生きる」を選択した児童生徒の割合は、大人と同様に比較的高い。  
⇒pp. 134～135

## 【地域へ】の背景となる主な分析

- ① 「参加した体験活動」の7項目について「参加の仕方」を見ると、「学校の授業や行事、町内会など地域の活動として参加した」と回答した割合は、「自分から進んで参加した」、「他の人にさそわれて参加した」と回答した割合を上回っており、学年が上がるにつれて増加している。また、学年が上がるにつれて、「参加した」経験が多くなっている。「自分から進んで参加した」と回答しているのは、小学生が多い傾向にある。「自分から進んで参加した」が最も多いのは「地域の伝統行事」で、その割合は、平成19年度と比較すると、全校種で増加している。  
⇒pp. 105～107
- ② 「ボランティア活動への関心」について「ある」「少しある」と回答した割合は全校種で増加している。また、体験活動へ何らかの「参加の仕方」で参加した経験のある児童生徒は、参加経験のない児童生徒よりも「ボランティア活動への関心」が高い傾向にある。  
⇒pp. 109～111
- ③ 「ボランティアへの関心の理由」について、全児童生徒で回答の割合が最も高いのは、平成24年度において「困っている人の手助けをしたいから」(65.6%)であり、次いで「地域や社会を良くしたいから」(45.1%)である。  
⇒p. 112
- ④ 「どこで暮らしたいか」に関して、この10年間の経年比較を見ると、「県外」と回答した割合が減り、「今住んでいる市町」(6.5ポイント増)、「県内の他の市町」(5.3ポイント増)を回答した割合が増えている。  
⇒p. 120
- ⑤ 「地域での子どもへの接し方」について、平成24年度では、教員、保護者ともに「悪いことをしていることに気付いたとき、注意したり、叱ったりしている」と回答した割合は約5割である。また、「子ども会等で一緒に地域の活動をしている」と回答した割合は保護者は約4割であるが、教員は2割であり、「地域の子どもたちとの関わりはほとんどない」と回答した割合は保護者の約1割に対して教員は約2割である。  
⇒p. 122
- ⑥ 「地域の問題」について、教員・保護者の合計で割合が最も高いのは、「よその家の子どもを叱らなくなった」(36.4%)であり、次いで「隣近所のことに無関心な人やあいさつをしない人が増えた」(31.1%)、「子どもが地域の人と接する機会が少なくなった」(29.9%)となっている。  
⇒p. 124
- ⑦ 「現在の青少年の憂慮すべき点」について、教員・保護者の合計で回答の割合が最も高いのは、「自己中心的な考えや行動が多い」であり、次いで「忍耐力がない、我慢できない」、「精神的なたくましさが乏しい」の順である。  
⇒pp. 128～129
- ⑧ 「望ましい成長発達を支える取組」に関して、教員・保護者の合計で回答の割合が最も高いのは、「人間関係を築く力を充実させる活動の推進」(50.0%)であり、次いで「家庭でのしつけや教育の大切さについての啓発」(45.4%)、「自然体験や社会体験の拡充」(31.0%)、「地域での青少年の居場所づくり」(19.6%)となっている。  
⇒p. 132